青年団×パスカル・ランベール（フランス）
『KOTATSU』第2回報告書〈稽古〉
横堀応彦

青年団とパスカル・ランベールによる国際交流プロジェクト2021『KOTATSU』の第1次稽古が7月16日から30日までこまばアゴラ劇場にて行われた[1]。当初この稽古にはパスカル・ランベールが来日して参加する予定だったが、入国制限の関係でパスカルはヨーロッパからZoomで参加する形になった。毎日の稽古は17時から20時（ヨーロッパ時間の10時から13時）に行われ、こまばアゴラ劇場内には複数のカメラが設置され、パスカルが複数の角度から俳優たちの演技を見ることができる環境が整えられていた。

通常稽古初日には台本を最初から最後まで読む「本読み」が行われることが多いが、パスカルの稽古は「フランスの俳優のように恐れずに質問してほしい」という要求のもと、1場ずつ台本を読んでいき、その場面について質問があれば徹底的に話し合うスタイルで行われた。初日の稽古は第1場から順番に読み進み第9場で終了し、2日目の稽古は冒頭から第9場までを通して読んだ後（約20分。作品全体の6分の1程度）、第10場以降へと進んでいった。青年団という既に出来上がっているカンパニーだからか、自分が出演する場面でなくとも俳優、スタッフたちが積極的に質問し、パスカルはその全てに真摯に応答して、各登場人物の役柄についても言葉を尽くして説明する姿が印象的だった。稽古場には翻訳者の平野暁人がほぼ毎日参加し、共同演出・日本語監修の平田オリザも2回程度参加して日本語セリフを入念に整えていく作業が行われた。後半の稽古は仮組みされた装置の中で実際に動きながら行われ、第1次稽古では大まかな動きのみが付けられ、細かい動きは翌月後半から江原での第2次稽古で行われることになった。

今回の第2回報告書では第1次稽古が終了した時点での記録として、青年団の俳優で今回『KOTATSU』に出演する太田宏、知念史麻、森一生の3名に行ったインタビューを収録する。

――『KOTATSU』では登場人物の役名が皆さんの実際のお名前になっています。まずは今回出演が決まるまでの経緯について教えていただけますか。

太田　フランスの作品は劇団内オーディションがありまして、今回のパスカルの作品もオーディションがあって、希望する劇団員はみんな東京もしくは江原で受けることができました。

――オーディションはどのような内容だったのでしょうか。

太田　今回のパスカルのオーディションは特殊な形式でした。何かセリフを読むとかそういうことはなく、パスカルと通訳の方がいらっしゃって、大体10～15分くらい面接をして「それじゃあ」という感じで終わりました。

――森さんもパスカルさんと既に『GHOSTs』でご一緒されていますよね。

森　はい。僕はオーディションを受けるというよりは、久しぶりにパスカルが来るので会いに行こうみたいなノリで会いに行きました。本当に雑談だけして、最近そうなんだみたいな感じで。そしたら最後に「じゃあよろしく」みたいな感じでした。

――知念さんは今回がパスカルさんと最初のお仕事になります。

知念　太田さんが出演していた『愛のおわり』の日本公演のときにコーラス隊のママさんグループが一瞬出て歌って去るシーンがあって、そのコーラス隊でちょっと通り過ぎたことがあります。あとはパスカルがジュヌヴィリエ国立演劇センターの芸術監督だったときに、青年団の『砂と兵隊（Sables&Soldats）』という作品をフランス人の俳優数名と日本人の俳優二人で平田オリザ演出で上演したことがあって[2]、それに参加していたので劇場で何度かすれ違ったことはありました。

――『砂と兵隊（Sables&Soldats）』はフランス語上演だったのでしょうか。

知念　もともと日本人の俳優でやっていた作品をフランスでも上演することになり、敵兵役の二人だけが日本から参加しました。日本人の俳優同士は日本語で会話するんですが、フランスの俳優と一瞬出会う場面があって、その場面はフランス語でした。出演が決まったときは全くフランス語ができなくて、1か月くらいフランス語を習わせてもらったはずなんですけど、今は単語が時々聞き取れるくらいで、全然わからないです。私の場合は出産・育児を経て8年ほどブランクがあり、パスカルとの面談は劇団の活動拠点となる江原への移住が決まった直後のタイミングでした。「8年間どう過ごしていたのか」と聞かれたので、「もうすぐ江原に引っ越して、演劇を再開しようと思うんです」という話と、「どうしてそんなに演劇に戻りたかったのか」と聞かれたので、平田オリザの戯曲が私にとってすごく切実であるという話をしました。あとはパスカルが一緒に仕事をしているオードリー・ボネットという女優さんがいて、私は『砂と兵隊』で共演してとても魅力的な大好きな女優さんだったので、彼女の近況を聞いたりして。私も森さんみたいな世間話と自分の近況報告みたいなので終わっちゃいました。

――稽古を拝見していると、太田さんはパスカルさんの話すフランス語を理解されていますね。

こまばアゴラ劇場での稽古の模様（左：2階劇場、右：5階稽古場）

太田　2007年に青年団が最初にフランスと交流したプロジェクトで『別れの唄』という作品があり、それに出演しました[3]。平田オリザがテキストを書いて、ロラン・グットマンというフランス人が演出した作品で、日本人3人以外にフランス人が5人出演するんですが、彼らとの会話は全部フランス語でした。そのとき初めてフランスに行って、その作品が向こうで成功して2009年には17都市ツアーをしたので、合計7か月ほどフランスに滞在しました。

――それまで、フランス語は……。

太田　全然できなくて、アルファベットも読めない状態でした。今回と同じように1年前にオーディションがあって、稽古が始まるまでの1年間フランス語の学校に行ってもいいよと言われていたんですが、フランスに行ったときには自分の名前が言えて、やっとアルファベットが読めるくらいの状態でした。稽古が始まったらとんでもない量のセリフがきてしまって、初演のときはフランス人にセリフを吹き込んでもらったものを聞いて、最終的には音で覚えました。

――知念さんは今回初めてのパスカルさんとの作品作りですが、実際に稽古をされてみていかがですか？

知念　台本を初めて読んだとき、自分のセリフがたくさんあることに驚きました。普段は一人であんなに長く喋り続けるということがないので、成立するのかなとか、観ている人は面白いのかなとか、すごく戸惑ったんですけど、いざ覚える段階になって声に出してセリフを言い始めてみたら、黙読していたよりもしっくりきたんです。翻訳者の平野暁人さんは以前別のお仕事でご一緒した方なので、私のことをわかった上でフランス語から日本語に翻訳してくださったからではないかと思います。あとは青年団の稽古とパスカルの稽古が全く違うのが新鮮で驚きました。

――先日平野さんとお話をしたときにも、オリザさんの稽古とパスカルさんの稽古が全然違うということを話されていましたが、その違いについて教えていただけますか。

知念　演出家がこれだけ台本について多く語ることも、作品ができた背景やこういうことを考えながらこのシーンは作ったんだということも、オリザさんの稽古では、基本的には行われないことなので、立ち稽古に入る前に丁寧に作品についての道筋みたいなものをみんなで共有することにとても驚きました。あとは日本だと「ダメ出し」という言葉があって、基本的に良かったところはスルーして、気になったところに対して演出家がコメントをすることに慣れていましたが、パスカルは「いいね！」とか、褒めることにも時間を使います。最初はそれにびっくりしましたが、すごくいいなと思いました。パスカルは作品と関係があれば自分のこともよく喋るし、自分でも演技をやってみせるし、そのような演出家と俳優の関係性がオリザさんとの稽古とは全然違うなと感じました。

――森さんはパスカルさんと作品を作っていく中で、他の演出家との違いを感じることはありますか。

森　ディスカッションをする時間がすごく長いですね。パスカルが作品の背景や文脈を色々話すことで、俳優の理解を広げる時間が長く取られています。最初にパスカルと作品を作ったのは『GHOSTs』という作品でしたが、それまであんなにフィジカルな人だと思ってなくて、割と作家性というか、オリザさん的な劇作家寄りの人だと思っていました。ところが実際にやってみると、かなり俳優の身体に興味がある人で、それが新鮮というか面白いです。今回も謎に踊ったりするシーンがあるし、どのくらい俳優の身体性につっこんでくるのかなと楽しみです。

――太田さんは、『愛のおわり』でパスカルさんと長く一緒に仕事をされて久しぶりのクリエーションになりますが、久しぶりに一緒にやられてみていかがですか。

太田　パスカルだなあという印象です（笑）。一番顕著なのは、こっちがセリフを言っている最中に、「そうだよ！YES！」とかいうのは、絶対に平田は言わないですね。フランス人の演出家の中でも珍しいタイプなのか、自分も一緒に興奮しちゃうところが、パスカルの特徴かなと思っています。

――今回の太田さんの役は出ずっぱりですが、ほとんど喋らない役ですよね。

太田　ここまで喋らない役は多分初めてぐらいで、すごく楽しいですね。今はまだ何を積み上げればいいのかをずっと探している感じです。パスカルもこの作品を書いて興奮したと言っていましたが、僕も同じように、それをどういうふうに舞台上で成立させるか最後までもがき続けるんだろうなと予想しています。

――知念さんは太田さんの奥様役ですが、今回の2週間の稽古を経て、どのような感触を持たれていますか。

知念　この2週間はセリフを言うのに必死になってしまって、最後の方に動いてやってみたときに、自分が長く喋っているときにも周りに人がいるんだということがやっと感覚として体感できました。その結果、また振出しに戻って、もう1回台本を読み直しているところです。たくさんの役者が出ている場面もあれば、太田さんと私の二人だけの場面もあったりして、一人で台本を読んでいたときには全然イメージしきれなかった相手の様子が見えてきました。今はまだそれを受け止めきれていないので、江原に入っての稽古で間に合うかドキドキしています。

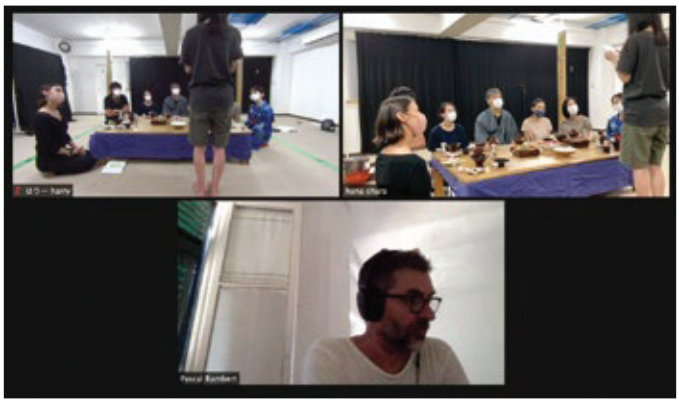
――森さんはお二人の息子役で、作品の中で重要なポジションですけれども、ここまで2週間やってみていかがですか。

森　読めば読むほどというか、やってみればやってみるほど異常な家族だなって感じますね（笑）。その場にいるのに全く喋らない父親とか。リュック・ベッソンじゃないですけど、外国人が見た日本の風景みたいなものの悪い方にいかなければいいなと思っています。最初から不思議な空間で、読んだときの不思議さと、実際に自分が空間にいるときの不思議さが面白い感じに積み上がっているので楽しみです。

――最近は色々な国際共同制作がありますが、その多くはその都度色んな俳優をキャスティングしていくものだと思います。今回は青年団とパスカルさんとの国際共同制作ということで、青年団の中でキャスティングされていることで、俳優の皆さん同士は、基本的な演技の話法のようなものが共有されているといいますか、その中の関係性みたいなものがあって、それが作品のクリエーションにとてもよく作用しているなと感じています。今回のようにフランスの演出家とやるということは、青年団の劇団員の皆さんにとって、どのような刺激や発見があるのでしょうか。

太田　結局僕が出会った人たちは基本的にコンセルヴァトワールを出て、第一線でやっている人たちなんですよね。みんなものすごい知識人で、共演する俳優たちの多くも国立の4つしかない演劇学校を出ている選び抜かれた人たちで、それこそリュック・ベッソンの映画を見ていたら、知っている人が急にぽっと出てきたりするような、ものすごい第一線の人たちとやれている。では僕たちには何ができるのかみたいなことを常に考え続けられる環境なので、とても刺激的に感じています。

森　僕はフランスの演出家というよりフランスの俳優と一緒に『その森の奥』



Zoomでのリハーサル風景

という作品をやったんですが[4]、そのときに平田オリザの特にヨーロッパ圏における受容とか、今のフランスの現代演劇の話とかについて対話して、知識とか教養の交流ができたのが面白かったです。

知念　私はこれまでに海外の演出家の方と仕事をしたのは2011年の青年団国際交流プロジェクト『交換』の1回だけで[5]、今回が2回目です。私にとって他の演出家の方の作品に参加することで大きいのは、青年団でキャスティングされる役と全く違うタイプの役が配役されることが面白くて新鮮なところです。今は8年のブランクがあるので、この先青年団でどうなるのか私もまだ全然わかりませんが、20歳くらいで青年団に入ってから35歳くらいまでオリザさんと一緒に仕事をさせていただいた間、キャスティングされる役や、オーディションで配役される役は、似ているというか、何かしらの共通点があると思っていて、今回みたいな役はまずありえないんじゃないかなと感じています。だから初めて今回の台本を読んだときには、私オーディションで何喋っちゃったんだろうとか、パスカルは何を私の中で見たんだろう、大丈夫かなって思って、不安しかなかったです。自分が思ってもない役に挑戦できることは、青年団で平田オリザさんじゃない演出家の方とやることの特徴でとても面白いと感じています。

――私が伺えなかった日には平田オリザさんも稽古にいらっしゃったと聞いてますが、そのときの稽古はどのような内容だったのでしょうか。

森　オリザさんが来ているときは、パスカルはいなくて、オリザさんと俳優たちで、主に日本語のセリフについて、この言葉でいいのかとか、俳優側の違和感をすり合わせたりしました。オリザさんが大雑把に動きを付けてやってみるということもありました。

太田　僕たちは青年団の劇団員なので、平田オリザは僕たちのことをよく知っていて、作品のテイストを残しつつ、なるべく演劇的で翻訳的ではない言葉に変更していくという作業を色々していきました。音で聞いてわからない単語をよりわかりやすい単語にしたり、関係性が見えやすいものにしたり、セリフを整えていった感じです。

――今回はコロナ禍の中での国際共同制作ということで、本当は7月の稽古にもパスカルさんはいらっしゃる予定でしたが、結果的にZoom越しの稽古となってしまいました。Zoomを通してパスカルさんと作っていったこの2週間の稽古のことを最後に振り返っていただけますか。

太田　これだけ本格的なZoom稽古をしたのは初めてだったんですが、パスカルはとても耳がいいので、それでも成り立ったのではないかという気がします。僕らが喋ったセリフに対して、パスカルはニュアンスを受け取っているというか、微妙で微細な変化を聞き取ってくれるので、やれた部分はあっただろうなというふうに思います。ただやっぱり演劇ですから立体的な情報を作るためには身体の情報とか表情を全て含める必要があるので、来月パスカルに会って目の前で演技することがより楽しみになりました。

森　コロナ禍以降Zoom稽古はやっていましたが、それは簡単な本読みとかで、ここまでZoomで戯曲に向き合うっていうことは初めてでした。なんかやっぱり不思議でしたね。こっちは稽古しているんだけど、ネットの環境とかでいつのまにかパスカルがいなくなっているということもあって、誰がこの稽古を見ているんだろうということについて考えさせられました。演出家の身体がそこにあるということ、例えば演出家が稽古を見ながら、何か飲んだりとかフリスクを食べたりとか、動いているみたいな、そういう演出家の存在感があるということ自体も演劇の稽古において重要だったんだなと気づかされました。あとはこちらの反応がなかなかパスカルに伝わりづらいので、毎回手で大きなマルを作って、大げさに「わかりました」っていう表現をしていました。もちろんこれは優秀なスタッフがいっぱいいて環境を整えてくれたからできたんだなと感じています。

知念　私はパスカルとZoomじゃない稽古をしたことがないので、Zoomがなかったらどうだったかはわからないです。あとはマスクをして稽古をすることも当たり前になっていますが、こんなにマスクをして画面越しに稽古をすることが初めてだったので、ものすごくもどかしかったし、苦しかったです。

――江原に行ってからも稽古はマスクをしてやることになりそうですね。

知念　そうなんです。本番の直前までマスクやフェイスシールド越しに稽古をして、直前に取るというのが初めてなので、そこにすごく不安があります。急になくなったら、裸になったみたいな気分になって、感覚が変わるんじゃないかとか（笑）。その割に今回は繊細な感情の動きがどの役も求められているから、直前の調整が難しそうだなと思います。

――私も稽古場でコロナ禍のハンデも乗り越えていけるような作品が立ち上がる様子を拝見して、今から初日が楽しみです。

俳優インタビューの模様

インタビュー・文：横堀応彦

＊本インタビューは2021年8月3日10時から11時までZoomにて実施した。

1 報告者は稽古初日の16日と17日はアゴラ劇場2階劇場で、22日はこまばアゴラ劇場5階稽古場で、28日と29日は稽古場の密を避けるためオンラインで見学した。
2 http://www.seinendan.org/play/2009/03/2252
ジュヌヴィリエ劇場での稽古の模様は映画『演劇2』（想田和弘監督）で見ることができる。
3 http://www.seinendan.org/play/2009/01/2255
青年団からは山内健司、角舘玲奈、太田宏の3名が参加した。
4 http://www.seinendan.org/play/2019/07/6895
5 http://www.seinendan.org/play/2011/04/6354